様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 １３ 日現在

機関番号：８２７０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００９５２

研究課題名（和文）開国期・危機的状況下における知識人の情報活動と意思決定過程に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Information Activities and Decision Making Processes by Intellectuals in Crisis Situations at the Opening of Japan.

研究代表者
嶋村　元宏（SHIMAMURA, Motohiro）

神奈川県立歴史博物館・学芸部・主任学芸員

研究者番号：４０２６１１９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：「危機的状況下におかれた人間は、それまで蓄積してきた自らの経験と知識に照らし合わせ、その危機をどのように知覚し、いかなる対応をとることで、新たな時代を迎え入れようとしたのか」という普遍的な問いを明らかにすることを目的とした。
新たに収集した『米夷紀事』（国立国会図書館）から、仙台藩儒者・大槻磐渓の情報収集活動を具体的に知ることができた。『和米始末』（静嘉堂文庫）から、磐渓の開国論に変化がみられるのが安政2年であることも明らかになった。また、頼山陽門下の福山藩家老・江木鰐水や同儒者・石川和助の情報活動についても新たに『金川遊記』（関西大学図書館）を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ペリー来航に関する情報の伝播に重点が置かれて進められてきた幕末情報史研究に対し、情報収集活動の実態を示す新たな史料を発掘し、そこから具体的な状況を明らかにすることができた。また、これまで封建的で、非開明的な存在として評価されてきた儒学者たちが、情報収集及びその伝播に重要な役割を果たしていたことを指摘することができた。
さらに、ペリー来航、アメリカ人との交流を通じて大槻磐渓は、交易不可としていた対アメリカ政策を変え、全面的な開国論となっていたことを示すことにより、意思決定過程について明らかにすることができた。これにより、従来の日本開国史のイメージを改めるものとなった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to clarify the universal question; "Human being in a crisis situation tried to enter new era by how they perceived the crisis and what kind of response they took in light of their own experience and knowledge accumulated so far".
From the newly collected "Bei-i Ki-ji 米夷紀事"(National Diet Library), I was able to learn more about the information gathering activities of Bankei OHTSUKI 大槻磐渓, a Confucian scholar of the Sendai Domain. From "Wa-bei Shi-matsu 和米始末"(Seikado Bunko), it became clear that the theory of opening of Japan by Bankei changed in 1854(Ansei 2). In addition, I was able to obtain a new material; "kanagawa Yu-ki 金川遊記"(Kansai University Library) for the information activities by Gakusui EGI 江木鰐水, a chief retainer of Fukuyama domain and Wasuke ISHIKAWA石川和助(Tohoin SEKITOHO関藤藤蔭）, a Confucian scholar of the same.

研究分野：日本近代史／幕末維新史

キーワード：儒学者　大槻磐渓　石川和助（関藤藤蔭）　江木鰐水　幕末　金海奇観　海外情報　風説書

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで「幕末海外情報と危機意識」（JSPS 科研費 JP0971025：科学研究費補助金奨励研究（Ａ））、および「ペリー来航関係画像の史料批判的研究」（JSPS 科研費 JP18520484：科学研究費補助金基盤研究（Ｃ）（一般））などにより、日本開国史研究ならびに幕末維新期、特に開国期の情報史研究を進めてきた。どのような者たちによって文字や画像による情報媒体を対象として情報活動がおこなわれ、いかなる影響を及ぼしていたのかということを明らかにした。

特に後者においては、ペリーの肖像画をはじめとするペリー来航時の様子を描いた画像を対象に、史料批判の手法を用いて考察する中で、江戸時代における知識人であるにもかかわらず、それまで非開明的であるとされていた儒学者による情報ネットワークの存在を浮かびあがらせた。これらの成果は、「幕末の列強海軍情報とその実態―『阿蘭陀別段風説書』記載データを中心に―」（片桐一男編『日蘭交流史　その人・モノ・情報』雄山閣、2002 年）、「ペリー来航にかかわる情報取集活動とその伝播について―画像資料を中心に―」（『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』第 41 号）などの学術論文にくわえ、研究代表者が所属する神奈川県立歴史博物館において開催した『ペリー来航 150 年記念　黒船』（2003 年）、『ペリーの顔・貌・カオ―「黒船」の使者の虚像と実像―』（2012 年）などの特別展示やそれにあわせて刊行した図録、さらに一般向けの講演会などにより、学界のみならず社会へもその成果を還元してきた。

その結果、さらなる儒学者の情報活動の詳細を解明することが、学界ならびに一般の方々からも求められるところとなった。

日本史上〝近代〟の画期として位置付けられるペリー来航から始まる日本開国史研究は、国内の政治史・社会経済史に力点を置いて進められてきた明治維新史研究において、国際的環境にも目を向けることを主張した石井孝以来、羽賀祥二、加藤祐三、三谷博各氏らによって深められてきた。また、近年に至って麓慎一氏による研究が発表されるなど、多彩な蓄積があるものの、日本史上における一大変革期を対象とする日本開国史研究はいまだに多角的な視点から研究する余地が残されていた。

さらに、幕末維新期を対象とする情報史研究においては、宮地正人、岩田みゆき、太田富康、岩下哲典各氏によって名主層や大名層などさまざまなレヴェルを対象として、海外情報がどのようなルートをたどって集積され、また伝達されていったかについて実証的な研究が進んでいる。しかし、それらの情報をもとにいかなる意思決定がなされたかについての研究は充分なものとはいえない。なおかつ、研究代表者が先の研究で注目するようになった儒学者については、これまで日本近世史思想史、教育史、国文学研究分野における研究蓄積は豊富であるものの、日本開国史研究ならびに幕末維新期情報史研究においては、本格的に検討されていない状況であった。

本研究は、これまでの日本開国史研究において対象とされてこなかった儒学者に焦点を当てたことに独自性が認められる。これは、「ペリー来航関係画像資料の史料批判的研究」によって、ペリー来航期における儒学者による情報活動の一部を確認したことから、これまで日本開国史研究で本格的に対象となっていなかった儒学者を考察することで、新たな視点から日本開国史ならびに幕末維新期情報史研究に寄与できると考えるに至ったからである。「ペリー来航関係画像資料の史料批判的研究」は、石井孝が「保守的な思想に固まった者たち」と評し、非開明的な存在として位置づけられていたこともあり、これまで日本開国史研究において本格的な研究はされてこなかった儒学者を研究対象としたもので、本研究はその視角を継承している。さらに、「幕末の海外情報と危機意識」で問題とした海外情報と危機意識の関係について、江戸時代における知識人である儒学者をモデルケースとして考察することで、現代にも通じる普遍的な問いへの解を用意できると考え、本研究に着手した。

幕末維新期情報史研究は、社会史的視座から政治射程を試みるなかで、「風説留」の歴史的位置づけを論じた宮地正人「風説留から見た幕末社会の特質―「公論」世界の端緒的成立―」（『思想』1993 年 9 月号）を契機に活発化し、その後、ペリー来航に関わる情報活動について、岩田みゆき「大久保家の黒船情報収集について」（『歴史と民俗』第 2 号）、太田富康「ペリー来航期における農民の黒船情報収集―武蔵国川越藩領名主の場合―」（『埼玉県立文書館紀要』第 5 号）、同「幕末期における武蔵国農民の政治社会情報伝達」（『歴史学研究』第 625 号）のように、名主層の情報収集に焦点を当てた研究が発表されてきた。

また、「ペリー来航予告情報」研究から出発した岩下哲典氏は、アヘン戦争期からペリー来航期までを対象として、幕府、諸藩、庶民の各レヴェルにおける海外情報に関わる情報活動を分析し、『幕末日本の情報活動』（雄山閣、2000 年、改訂増補版、2008 年）としてまとめている。

しかしながら、以上の代表的な研究も含め、儒学者を対象とし、危機的状況下における情報活

動に焦点を当てた研究は、管見の限り見られない。

２．研究の目的

「鎖国」から開国へと激動の時代を生きた江戸時代の知識人を代表する儒学者に焦点を当て、対外問題にかかわる情報収集とその伝播（以下、「情報収集活動」という。）の実態を明らかにすることにより、〝危機的状況下におかれた人間は、それまでに蓄積した自らの経験と知識に照らし合わせ、その危機をどのように知覚し、いかなる対応を取ることで、新たな時代を迎え入れようとしたのか〟という普遍的な問いに、一つの解を示すことが、本研究の目的である。

３．研究の方法

（１）所在確認

本研究を進めるにあたり、関係史料の収集をおこなった。所在確認は、主に国文学研究資料館が提供する「日本古典籍総合目録データベース」を利用した。

検索画面において、以下のキーワードを入力し、得られた検索結果をもとに調査史料一覧を作成し、各所蔵機関から得られた情報を加味して、実際に調査、収集する史料を絞り込んだ。

キーワードは以下の通りである。

【人名】

- 大槻磐渓／磐渓／大槻清崇／大槻崇／磐翁・・・仙台藩儒者
- 河田迪齋／河田興／河田惠迪齋・・・昌平坂学問所教授・幕府応接掛林大学頭復齊随員
- 関藍梁／関研／研・・・膳所藩儒者・幕府応接掛林大学頭復齊随員
- 西坂成庵／西坂衷・・・加賀藩儒者
- 石川和助／関藤藤陰・・・福山藩儒者・老中阿部正弘の腹心
- 江木顎水・・・福山藩儒者
- 阪谷朗廬・・・広島藩儒者
- 松浦武四郎・・・北方探検家

【地名・用語】

- 金川／金河／神奈川
- 金海・・・「金川（かながわ）」の海。
- 浦賀

（２）収集

所在確認後、28 機関が所蔵する資料約 110 点余りを実見した。必要箇所についてはデジタルカメラにより撮影し、電子画像として収集した。

（３）分析

収集した資料について、儒学者の情報活動の実態について具多的に示している部分に注目し解読を進めた。また、当初一部交易容認論であった大槻磐渓がいつから全面的開国論へと持論を変化させるかについて考察した。

４．研究成果

本研究において、多くの史料にあたることができたが、特にこれまで知られてこなかった史料としては、『米夷紀事』（国立国会図書館）、『和米始末』（静嘉堂文庫）、『文鳳堂雑纂』（国立公文書館）所収「金海談」などをあげることができる。

『米夷紀事』は、大槻磐渓がペリー再来航時の探索で収集した情報をまとめたものである。ペリー再来航以前から自主的に浦賀周辺の海岸防禦体制を見聞したことや、磐渓と行動を共にした人物として、磐渓門下の塾生・横手新太郎、仙台藩絵師・辻探昌、銚子出身の宮内彦太郎と行動を共にしたことが判明した。また、情報提供者のひとりが上田藩士・恒川才八であることも確認できた。また、仙台藩主・伊達慶邦へ献上した、探索時に収集した絵図類をまとめた『金海奇観』(早稲田大学図書館)の成立について、ピストルの絵は、幕府応接掛・松崎満太郎へ贈呈されたピストルをスケッチしたことも明らかになった。

『和米始末』は、静嘉堂文庫のほか、東北大学附属図書館狩野文庫にも見出せた。この史料は、「「レヒソン」人名日本記　嘉永四年辛亥彼紀元千八百五十年」、「横浜下田二回約条　嘉永七年甲寅彼千八百五十四年」、「「ポルトメン」人名内密上書　同年八月」の三種類の文書がまとめられたものである。磐渓はこれらの文書からアメリカの対日政策を理解しようとしていたことがうかがわれた。磐渓の対米観を知るうえで重要な史料である。

また、磐渓がまとめた『金海奇観』から、「金海」という用語に注目し、「金海談」と題する史料を二種類確認できた。一つは、江戸の書肆山城屋忠平衛が珍しい話や資料を集めた『文鳳堂雑纂』に含まれる「金海談」で、嘉永 7 年の日米交渉の様子を伝えるものである。久留米市立中央図書館にも同一の写本が残されていた。これは、久留米藩士がひそかに写したものとされている。なお、「金海」という用語をはじめて用いたのは、磐渓の父・大槻玄沢であったと思われる。玄沢の著作に、仙台近郊金華山特産の赤ナマコについて解説した『金海一珠』がある。

一方、頼山陽門下の福山藩家老・江木鰐水と同藩儒者・石川和助（関藤藤蔭）が、幕府応接掛井戸弘道の家来として、アメリカ使節の動向を探索した際の記録としては、すでに広島県立歴史博物館が所蔵する『窪田家文書』中の「雑綴」に含まれていることが確認されていたが、同内容の史料が、関西大学図書館に『金川遊記』として所蔵されていることを見出すことができた。これは、東洋史研究者の増田渉が旧蔵していたものであり、もとは漢学者・儒学者によって移し伝えられたものと推定される。

意思決定過程に関しては、当初一部交易容認論であった大槻磐渓が、ペリー来航、アメリカ人との交流を通して全面的開国論へと持論を展開させていったことを跡付けることができた。これは大槻磐渓については、「開国派」としての評価が定着しているが、この通説に対して再評価を促す指摘をおこなうこととなった。これまで嘉永 2 年に老中・阿部正弘へ提出された『献芹微衷』により、進取開国派とされていたが、『献芹微衷』は、「鎖国」態勢の維持を目的としてロシアと同盟を結ぶことで新たな安全保障体制を構築することを説いたものであり、その見返りとしてロシアへ通商を許容するものだったことを確認した。この点については、『嘉永五壬子年和蘭告密書御受取始末』（宮城県図書館）の書き込みなどから、ペリー第 1 回来航直後の嘉永 6 年 8 月時点で、アメリカとの通商を許すべきではないとしたことからも裏付けられた。

さらに、磐渓がアメリカの対日政策に接し、意思決定に変化をもたらしたのが、安政 2 年の下田における日米和親条約批准書交換以降であることも『和米始末』から明らかにすることができた。

史料的制約から江木や石川等、頼山陽門下の儒学者については、研究を深めることが困難であった。『雑綴』や『金海游記』などを手掛かりに研究の深化を図っていくことが今後の課題として残された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 嶋村元宏	４．発行年 2021年
２．出版社 —	５．総ページ数 70
３．書名 開国期・危機的状況下における知識人の情報活動と意志決定過程に関する研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

◆口頭報告
・2020年5月　調査研究報告会「仙台藩儒・大槻磐渓の情報収集活動について」（於：神奈川県立歴史博物館）※COVID-19により、紙上報告へ変更。
・2020年8月　「オランダ別段風説書の研究」研究会「大槻磐渓の異国情報分析―『大槻清崇雑記』中の朱書きから―」（於：リモート会議）
・2021年3月　調査研究報告会「幕末期における対外関係文書は如何に読まれたか―大槻磐渓の書き込みを手掛かりに―」（於：神奈川県立歴史博物館）

◆展示
・2021年3月～10月（予定）　科研費成果報告パネル展示　『米夷紀事』にみる大槻磐渓によるペリー来航前後の情報収集活動　於：神奈川県立歴史博物館

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関